
手帳少女

椎名緋色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手帳少女

【Nコード】

N1743C

【作者名】

椎名緋色

【あらすじ】

ピンク色の手帳を持つ、一人の少女の物語。

私の持つてる小さな手帳
ピンク色の小さな手帳
私だけを記す小さな手帳

- 手帳少女 -

私は名前のない少女。

回りからそう呼ばれている。

理由は多分、存在感が少ないからだろうと私は思う。

クラスの中では浮いていると言うより

沈んで姿が見えないとか、そんな感じ。

視線を感じないのが分かるんだ。

だから私は俯いて、ただこの小さな手帳とにらめっこする毎日なんだ。

この手帳に文字を書き込むたび

文字を書き綴るたびに、こころが安らぐ。

私は存在してるんだって、そう思えるんだ。

高校に入ってから、さらに存在感がなくなっていった。

クラスから忘れられていたりとか、そういうのじゃない。

クラスメイトだけじゃなくて、先生までが私の存在を見ていない。

まるで教室の中一つに穴ができたように、私はそこにいた。

いつも外を眺めながら、その空気に流されて。身を任せて。

誰も声をかけてはくれない。

わざわざ中学の知り合いがいなくて選んだのに。

それなら新しく友達を作れるんじゃないかって、そう思って。

けれどそんな考え方は打ち砕かれた。

だから私はまた一人ぼっち。

“名前のない少女”は“存在のない少女”へと変わった。次第に私の中から、自分が消えていく。

そんな考えさえ生まれてきた。

孤独感とはまた別の。

罪悪感に似た感情が一つ、また一つ。

私が何をしたって言うの？

私が誰かを傷つけたの？

不安なんてのはとうに感じてる。

悲しさなんてのはとうに忘れた。

廊下を歩いていて感じるのは

“存在していない”という空気だけ。

そんな毎日を、一日ずつ手帳に書き記した。

手帳を書く私には名前はなくて。

手帳の中の私は名前も、存在もある。

いくつもの模様、容、パターン。

それらが入り混じって、私の手帳が出来上がる。

それが私の全て。

手帳と一緒になら、大丈夫。

この手帳と一緒になら、大丈夫。

私の心はそう呟いていた。

私の家には父と母と、姉がいた。

四人で過ごしていた日々には、確かに“私”がいた。

ちゃんと存在していた。

けれど、父と母の仲が嫌悪になり、別居状態となって。姉が母に連れて行かれたとき、私の中で何かが欠けた。父の心も何かが欠けたように、仕事に酷く打ち込んだ。そして、帰ってきてはお酒に入り浸っていた。

私の声も届かなくなつた。

その時だった。

家族が壊れたんだと感じたのは。

それから数ヶ月と経たないうちに、父と母は離婚した。

私は父のほうに引き取られることになった。

父は、何か幻覚を見るように酒を飲んで暴れていた。

そのせいで、帰るたびに家は滅茶苦茶になっていた。

強盗に入られたかのような空間の真ん中に、父は座っていた。

酒瓶を片手に持ち、窓の向こうに目をやって。

しきりに母の名前を呟いていた。

『戻って来いよ、俺も言い過ぎた』と、機械のように何度も。

繰り返していた。

元々父が悪いわけではなかったのに。

父は変わってしまった。

あの頃の父は戻ってこない。

家族は壊れてしまったんだ。

離婚して一年が経った頃。

私に家に戻ると、家の中はやけに静かだった。

荒らされてた跡も残っていない。

不審に思ってた家に入ると、そこには確かに人の存在感があった。

けれども大切な何かを感じなかった。

リビングの扉を開けても、綺麗でいつもと変わらない。

クッションの乗ったソファ。

テーブルクロスが敷かれた机。

いつもと変わらない、二人には広すぎるリビング。そして台所。

リビングにいないなら、寝室かと思って二階へと上がった。

短い廊下の一番奥の部屋が、父の部屋。

その扉を、開けた。

しかし、やっぱり誰もいない。

けれど、不自然だった。

机の上が片付いている。

父の机はいつも書類やら本やらが置いてあって、とてもじゃないけど見てられない。

何度注意しても直さなかった。

B型の特性かと思ったりして、手を焼いてたんだ。

けど、今日はその机には一枚の紙以外何一つ乗ってない。

私は惹かれるように、その紙を手を取った。

その紙には、たった一言だけ言葉が添えられていた。

「悪いな、水希」と。

すぐにわかったんだ、その言葉で。

必死に部屋を出て、お姉ちゃんの部屋、お母さんの部屋。

私の部屋と見回っていなくて。

一階に降りて、急いで目の前のバスルームを開けた。

急に血生臭い空気が立ち込めてくる。

暗がりのバスルームには、人影があった。

恐る恐る近づいて、触れようとして。

気づいた。

父だと言ったことを。

包丁を片手に持っていると言ったことを。

手首から血を流していると言ったことを。

死んでいると言ったことを。

それが高校一年の頃の夏。

私の心は、崩れた。

絶望感を刻み込んだ。

けれど手帳があるから大丈夫。

心はそう、静かに呟いていた。

半年経ち、親戚に引き取られるのを拒んだ私は、独り暮らしを始めた。

独りなら何も起こらないだろう。

私はそう考えていた。

しかし、心はそれに耐え切れなかった。

夢の中には、私を避ける人の視線が映り。

父の死んだ場面が鮮明に残っていた。

毎日そんな夢を見て、目を瞑っても寝付けず。

ただ暗い空間に怯えた。

もうすぐ私の心が全て壊れる。

脳がそれを感じたのは、そんな時だった。

なんで私はこんなになっただろう。

いつからだろう。

いつからだっただろう。

“存在”がなくなったのは。

思い返してみると、小学生の高学年だった。

弱かった私は虐められていた。

よく助けてくれたのは姉だったけれど、姉が中学に入ってから私は

一人ぼっちだった。

虐められて帰ってきて、姉に泣きつく。

家が私の安全地帯だった。

なのに。

姉はもういない。

家ももうない。

私には何も残っていない。
残っていないんだ。

私は全てを失った。
私は全てを失った。
だから、もう、いい。
失ったのだから。

小さなノートに文字を綴り終え、そのノートを閉じた。
そして、屋上の縁へと足を掛ける。
空がやけに低く感じる。

青い青い空。

地上がやけに遠く感じる。
いつも過ごした校庭。

どれもが近く遠く感じる。

どうしてだろう。身体がやけに軽い。
まるで羽でも生えたかのようにだった。

私は後ろを振り向いて、手帳に別れを告げた。
いつも私の傍にいた手帳。

もう開くことはない。

私の手帳。

地上を上から眺めた。

既に縁を蹴り飛ばし、身体を宙に飛ばす。

束の間の無重力空間。

それを感じた時、何かから開放された気がした。
もう戻れない、戻ることはない。

私がそう決めた。
誰の意見も聞かない、聞けない。
もう自分を失ったから。

私は名前のない少女。

私が死んでも誰かが叫ぶだけ。

私は名前のない少女。

私が死んでも嫌がるだけ。

私は名前のない少女。

私が死んでも誰も気にすることはない。

私は名前のない少女。

私が死んでも誰も涙を流さない。

私は名前のない少女。

私が死んでも別に何も起こることはない。

私は名前のない少女。

私はもうこの世にはいないの。

私は名前のない少女。

私はもうこの世にはいたくないの。

私は名前のない少女。

私はいなくなりたいの。

私は名前のない少女。

私は名前のない少女。

私は名前のない少女。

私は

彼女は取り戻そうとしなかっただけ。

彼女は近づこうとしなかっただけ。

彼女は一歩前に出ようとしなかっただけ。

彼女は手帳と一緒に自分の殻に籠もってしまっただけ

彼女は大事な事を忘れていた。

みんなと触れ合うということ。

自分で断ち切っていたんだ。

つながりを。

破れなかったんだ。

自分の殻を。

少女は呟いた。

「悲しい」と。

夕暮れの校庭から、叫び声が上がった。

彼女は名前のない少女。

. D i F

(後書き)

この、「小説家になろう」のサイトでの第一作目です。お楽しみいただけただけでしょうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1743c/>

手帳少女

2010年10月28日08時25分発行